
ハルト～願い屋～

鎌学 文芸部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルト〜願い屋〜

【Nコード】

N7991C

【作者名】

鎌学 文芸部

【あらすじ】

トオル。強い願いを持った少年。気づいたら不思議な列車に乗っていた。その列車は他人の願いをかなえる列車だった。自分の願いがかなわないこの列車でトオルは運命を変えたかった。

第一章 不思議な列車

ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン
電車の音だろうか、すごく近くで聞こえる。

ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン
何度も何度も繰り返される。

家の近くに線路なんてあったっけ？

ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン

ここでボクは気づいた。いつまでも同じ音が繰り返されている。もしかしてと思って、ボクは体を起こした。

日差しが入るはずの視界は真っ暗のままだ。

まだ夜なのかな？ それにしてもおかしい。なにかがおかしい。

ボクは少し経つと自分が座っているところがどこなのか把握した。ここは列車の中だ。このイスといい、ひじ置きといい、確実に列車だ。

予測が当たってしまった。

でもなんで？

ボクはあたり一面を見回して、昨日のことを振り返った。

ザーツ、ザーツ、ザーツ

そこにはあたり一面青い海が広がっていた。

ここは地元の海だ。砂浜はゴミも落ちてはいるが、きれいな方だ。小学生の頃、ここに引越してきて一番最初に来たのがここだった。

それ以来、ボクがここに来るのは珍しくない。たまに、ここに来ては時間をつぶす。

家よりもどこよりも落ち着くのがこの海だ。

ボクは浜辺にあぐらをかいた。砂がぬれていたのか少し冷たい。

そのまま波の音をいつものように聞いていた。

ボクはうつとうとして、たぶん寝てしまったのだろう。

砂浜に倒れていたから、はたから見たら死んでるように見えなかったかもしれない。

起きたときはすでに時計の長い針が半周していた。

「やばっ」

母さんに怒られるぞと思いつながらボクは立ち上がった。

そこまでは、よくあることではあった。

でも、そこからは違った。

ボクは砂浜を歩き出した。

歩き出して何秒かしてボクは気づいた。

海に背をむけて歩いているのにいつこうに前に進まない。

進んではいたんだろうけど、距離は縮まらなかった。

おかしい。絶対に変だ。

もう一度、歩こうと思ったときなぜか海は目の前にあった。

浜辺に向かって歩いていたのに、海に背を向けていたのに、海は

目の前にあった。

そして、ボクはまた気づいた。

海がせまってきたのだった。

走った。懸命に走った。でも、その努力はみもらなかった。

慌てふためいていてもなにも変わらずせまってくる海にボクは飲み込まれた。

そこから、今までの記憶はない。

列車に乗った記憶なんてさらさらない。

でも、乗っているのは事実だった。

事実だけど、受け入れがたい。

ボクはとりあえず状況を把握しようと思い、席から立ち上がった。

「あ、おはよう」

不意に後ろから声がした。

驚いてボクは腰をひじ置きにぶつけてしまった。

「あ、ごめん、びっくりした・・・よね？」

そりゃびっくりしたよ。でも、言う気にはなれない。席の上から顔を出す形で、女の子は話しかけてきた。顔からしてボクと同じくらいの年だろう。

「あ、ごめんなさい、えと私はトモリって言います」

トモリ？ 戸森か。

「えと本名は言わなくてもいいですよね・・・」

本名？ トモリってのは本名じゃないのか？

「あの、お名前いいですか？」

「千葉」

「チバ？ チバがドライブ名なんですか？」

ドライブ？ いったいなんのことなんだ？

「あ、やっぱり」

そう言っただけでトモリというやつはお辞儀をした。

「すみません、やっぱり、初めての人ですよ」

トモリはそう言い残し、俺の座ってる席を離れた。

薄明かりが窓から入り始めた。朝になったんじゃなくトンネルを抜けたみたいだ。

明かりが入ると同時に自分のまわりにも人がいることに気づいた。ボクよりも大きい人、小さい人もいる。

ボクは立ち上がって車両の中を見渡した。

床は木でできていた。もうとつくの前に走ることをやめてしまった車種だ。

窓から見える景色がゆっくり動いていたから、スピードはそんなにでないんだろう。景色が目で追えるほどの速さだった。景色は見たことのないものなかりで新鮮だった。

窓の外をのぞき込むボクに背の高い男が話しかけてきた。

「いい景色だね」

話しかけてくるのがわかったから驚かなかった。

「ボクもここは久しぶりだな」

そう言っつて男は窓の外を眺めたした。

「どこから来たの？」

そんなこと自分が知りたい。わかるわけなかった。

「わかんないか・・・」

「俺もよくわかんないんだ」

自分と同じ境遇の人がいた。それが少しうれしくて安心した。

「急にここにいて・・・」

「俺もだよ」

列車はまたトンネルに入って視界が真っ暗になった。

ボクが席に座ると男が「いいかな？」と聞いてきたからボクは頭を縦に振った。

男は対面式のイスの反対側に座った。

「あ、ごめん、俺はスウラ、君は？」

この電車に乗ってる人はみんな名前を知りたがるのか？

ボクはそのドライブとかいう名前をもっていない。

「知らない・・・です」

「あ、そつかそつか、そうだよね、ごめんごめん」

納得したといった雰囲気ですウラはうなづいた。

「えーと、じゃあ、今は・・・フタか？・・・会った？」

知らない人だけど、同じ待遇だったから信頼できる気がした。

「トモリさん？ ですか？」

「そうそう、トモリか。会ったんだね？」

ボクはうなづく。

「じゃあ、話は早いか」

話？ いったいなんのことだ？ ボクがここにいる理由を先に教えてほしかった。

「トモリは今回、教育役だから」

教育役？ ボクのもの？ わからないものだらけだ。

「あ、でもドライブはまだもらってないか」

勝手に話を進めるスウラにボクは少しいらだち始めた。

すると、どたどたとトモリが走りながら現れた。

「すいません、遅れました、あれ？ スウラさんじゃないですか」

「まあ、座って」

トモリはボクの前を通ってスウラの隣に座った。

「スウラさんは相談役なんですよー」

そう言いながらトモリはクリアファイルから何枚か紙を取り出してボクに渡した。

「現在の役員さんの名簿です」

手渡されたプリントには

主長 タガル

副長

マール

・

ソウオウ

相談役 スウラ

教育役

トモリ

と書いてある。全ての名前がカタカナだ。ドライブなんだろうか？

「今回、私、教育役なんですよ！」

指差すトモリだったけど、ボクはスウラから紹介されていたからもう知っていた。

「それとこれね、君はいきなりサガイだから」

サガイ？ またわからないことだ。

「俺はラークだから、君のフツ上だね」

「あ、ごめんなさい、言い忘れてました、サガイはランクで、数字的には3です」

ランク？ いったいなんのことなんだ。

「ラークは10だ、12の上のサベレンで出られるんだ」

出られる？ なにからなんだ？

「じゃあ、これが君の名前です」

手渡されたプリントにはこう記されていた。

「今日から君はハルトだ、改めてよろしくな」

ボクはスウラと握手をした。ついでにトモリとも握手をした。

いままでのボクはこうだ。

なにをしてもきもがられる。毎日がそうだった。

「おい、トオル」

ボクの机の中にはなくなっただかのように見えた弁当のご飯がつまっていた。

「なにびつくりしてんの？」

「ハハハ！ うける！ 驚いてんの！」

ボクをみんなは笑う。なんでだろう。ボクはなににも悪いことをしていないのに。

「なあ、お前の弁当どうしたんだよ？ なあ？」

なにが面白いのかボクには理解できない。

「おかずは？ あんのか？」

きつとここでボクが弁当の中を確認したらまた笑われる。

「見せてみるよ！」

バックがボクの手からぶんどられて、飯田が弁当箱を取り出す。

「こいつの弁当箱、ヒコーキとキュウキュウシャだぞ！」

「だつせー、きもいんだよ」

ボクが選んだ訳じゃない。好んでそれになんかしてないのに。

「中見てみようぜ」

二段弁当が開かれる。そして、どつと笑い声が出る。

ボクをあざ笑う笑い声だ。

「ハハハ！ 上の段も下の段もなんもないぞ！」

ボクがしたんじゃない。したのはお前たちだろうが。

「ご飯はもう見つかったのか？ トオル？」

机の中はべつとりとしたご飯でいっぱいなんだ。それも、こいつ

らのせいなのに。

「うわっ！ 汚ね！ 机の中米だぞ！」

お前らがやったんだろ。でも、ボクに言う権利なんかない。

なんでだろう。みんな平等だって言ってたのにボクだけ、なんでだろう。

「きめえんだよ」

「まじ、きもい」

なんで、こうやって言われなきゃならないんだろう。

でも今、ボクは学校にいない。

わけのわからない列車の中でわけのわからないやつらといる。でも、学校よりはましかもしれない。

そのわけのわからないやつらの教育役というトモリは、揺れている中でおいしいそうに紅茶を飲んでいる。

「ハルト君もどうですか？」

ボクは首を振った。嫌いじゃないけど、飲みたい気分じゃなかった。

スウラはちよつと前に席をたった。大事な会議らしい。

そのときボクはおかしいと思った。

この列車は見たところ一両しかない。運転席もあるし、その後ろの車両は見当たらない。

なのに、どこで会議をしてるんだ？

会議をする場所もないのにどこでするっていうんだ。

それに車両内のどこを見渡してもスウラは見当たらない。

ボクが首をかしげるとトモリはすぐに気づいてくれた。

「スウラさんどこ行ったか不思議ですよね？」

「あ、うん」

トモリは列車の後部ドアを指差しながら、笑って言った。

「次の車両ですよ」

そう言うとトモリは立ち上がってドアに向かった。

「見ててくださいねー」

トモリはドアを開けて列車の外に消えた。

ボクは立ち上がり、ドアを開け、列車の外にトモリがいないか必死に探した。

列車はゆっくりだったけど、トモリはもっと遠くに落ちたのかもしれない。

「トモリー！」

何度も何度も叫んだ。でも、結局トモリは見つからなかった。

探すのをあきらめてドアを閉めたとき後ろからトモリの声が聞こえた。

「ハルト君」

トモリは席に座っていた。

「びっくりしましたか？」

びっくりしたというよりは安心したといった感じだった。

「では問題です、私が高んどこにいるかわかりますか？」

わかるわけではない。こんなわけわかんないことばっか起きてるのにわるわけではない。

「実は数ヶ月前にわかったことなんです、この列車は形が丸なんです」

列車が丸？ この列車のどこが丸なんだ。

「今、ここが三両目の最後尾の対面席です。ハルト君にはまだこの後ろには行けないんですが、ランクが上がっていく度にとりもの両に行けるんですよ。だから、一両目と二両目にはハルト君も行けますよ」

でも、どう見たって前の車両はない。運転席があるからだ。

「運転席が・・・」

トモリは笑った。

「あ、ごめんなさい、あれ実は見えるだけでドアなんですよ」
そんなバカな。完璧な運転席なのに。

「行ってみるといいですよ。初めての人はだいたいがランク1の

エームからですから、一両目に行けば会えると思いますよ。」

要するに飛び級してこの3両目に来ちゃったってことなんだろう。

「あ、ごめんなさい」

トモリは時折、こういったふうに謝るみたいだ。スウラもそこが特徴だと話していた。

「列車が丸になるのはランク5のルライからでした、だからハルト君にはまだ普通の列車ですね」

それで説明は終わりと言ったふうにためいきをついたから、ボクは質問をすることにした。

「あの質問」

「はい、どうぞ」

トモリは質問されたことがうれしいようで笑顔を見せた。ほとんどの表情が笑顔のトモリだけど、今はすごくうれしいんだろう、とびっきりの笑顔だ。

「どうしてトモリは死ななかったの？」

「ごめんなさい、話していませんでした」

トモリは手書きのプリントを出した。

「これ、前に教育役だったフタさんからいただいたものなんです。それをボクは渡された。それはきれいな字で書かれていた。」

わかったことをまとめておく。

まず、自分よりもランクの低い車両へは自由に行き来できる。

運転席は見かけだけでドアになっている。

ランクが高くなったとき、荷物などすべて身の回りのものは一緒に次の車両に移動する。

列車はランク5以上になると車両間の空間がおかしくなり、列車の終わりがなくなる。

一両あたりの人数は8人。列車は12両。

列車の定員は8×12の96。

ランク13になり出て行った人物の代わりに新しく人物が配置さ

れる。(これを教育するのが役目)

教育する人物は一両目に配置されることが多いが、例外もある。

わかっていると思うが、列車に乗る際見えるのは自分の両だけ。

(ランクがあがっていれば、ランクが高くなった車両に乗り込むことになる)

列車についてわかっていることは以上。

PS 人の考えを読むのはそろそろやめな

理解しがたい内容に頭が混乱した。

「あ、もう着きますよ」

そして、列車は駅に着いた。

第一章 不思議な列車（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
システムがよくわからないかもしれませんが、
申し訳ありません。
よかったですら感想を書いてくださいね。

稀 ヒカリ

第二章 不思議な駅

「ここは第四の駅です。あ、と言ってもそう呼んでるだけですけどね」

第四の駅と呼ばれる駅に降りたボクは違和感があった。

ここまで変な世界なんだ。なにがあってもおかしくない。

そう思っただけで降りた駅はどこにでもあるような田舎の駅だった。自動販売機は見当たらないし、改札も当然一つしかない。旅人がよる駅をまんまに描いたような駅だ。

「改札は普通に通り返してくださいね」

ホームにはボクらしい人がいない。あんなに列車に乗っていた人はたくさんいたのに、降りてみると同じドアから出たトモリとボクの人だけだ。

「あの、トモリ」

質問したいことはたくさんあった。

「はい、なんででしょう？」

トモリは笑顔で振り返った。

「なんでボクらしい人がいないの？」

「あ、それは、出たらわかりますよ」

うれしそうに改札に向かってトモリは歩き出した。

「通るだけでいいですよ」

「ガコンー！」

親切なのか一回言ったのを忘れていたのかどっちでもよかったけど、改札はなぜかボクをはばんだ。

「あれ？ おかしいですね、故障かな？」

トモリの後について行ったボクは改札がしまったことで、質問の答えを見つけないことができなかった。

「どうしてでしょう？」

駅員もいないこの駅でボクらは問題をおこした。どうしようもない。でも、トモリは意外と落ち着いていた。

「ちよっと待っててくださいね」

トモリはポケットからケータイよりも小さいなにかを取り出して、耳もとに当てた。

「あ、トモリです。今回、教育役になったのですが、あ、はい、はい、そうです」

相手にはわからないのにトモリはお辞儀をしたり、首を振っていた。

とても優しい人なんだろう、動作がそれを表していた。

「はい、それでハルト君の・・・ええ、あ、ツナイさんを」

ケータイらしきものを口から少し遠ざけて「大丈夫です」とトモリは言った。

そして、またそれを口元に持っていつて話し始めた。

ボクは改めて駅を見渡した。見渡すと言っても小さな駅だからそんなに見るものはない。

青々とした木々がホームに沿って立っている。木陰はとても涼しい風が流れている。

秋のはずなのにセミが鳴いていて、ボクの顔からは汗が流れていた。

もしかしたら、ここは南の街なのかもしれない。だから、季節がまだ変わっていないんだ。

周りの風景は秋という感じは一切なく、まだまだ夏真っ最中といった感じだ。

片側しかないホームを端から端まで歩いて木しか見えない。

やっぱり田舎なんだと思った。

ボクが観察を終えて戻るとトモリはくっつくのない笑顔でボクを迎えてくれた。

「どうでしたか？」

ボクは待たせたことに謝っておくべきだと思った。

「あ、ごめん」

「いえいえ、いいですよ、不思議ですもんね」

改札の向こう側にいるトモリはまた笑った。

「あ、もう通れますから」

そう言われてボクはゆっくり歩きながら、改札を通り抜けた。

今度改札はすんなりボクを通した。

「ようこそ！ 第四の街に」

改札を出た途端、ボクは目を疑った。

今まで木で覆われていた改札の向こうの風景が急に光って変わった。

「うわ」

「おつとごめんよ」

改札を出たところにボクは止まっていたから、出てきた人とぶつかってしまった。

ホームには誰もいなかったのに、たくさんの人々がボクの出た改札から出てきている。

駅のエントランスには何人かの人々がグループとなり集まっている。待ち合わせをしているのかと思える人も何人かいる。

ホームはがらがらだったのにエントランスにはこんなにたくさんの方がいる。

「いったいどうなってるんだ？」

「ここが第四の駅、願い屋用エントランスです」

「願い屋？」

トモリは少しの間、固まった。

「ごめんなさい、ホント私教育役失格ですね」

トモリはまた茶封筒を取り出して、前と同じプリントを何ページかめくりボクに渡した。

「これが願い屋の要項です」

たくさん文字があったから、ボクは重要そうところだけ拾って頭に入れた。

願い屋要項

ここでは願い屋の仕事について話す。

願い屋は人の願いを叶えるのが仕事だ。

街（今のところ26個）に出て人の願いを叶える。

街の人間には俺たちはわからない。だが、物については例外だ。

願いをなんらかの条件で叶えることでランクが上がるようだ。

.....

「これもフタさんからいただきました」

フタからもらったというそのプリントは六枚でホチキスされている。

どのページを開いてもきれいに同じ字体が並んでいる。

「もしかして、俺は願い屋なの？」

「こぼれんばかりの笑顔でトモリは答える。

「はい、ハルト君は願い屋ですよ」

そう言くとトモリは腕時計を見てから、人の集まりに向かってだるうか歩き出した。

ボクもそれについて行った。

トモリが行った先にはスウラがいた。

「お、遅くなりました、すみません」

トモリが深々と頭を下げる。

「いやいや、改札を出られなかったんだろ？ よくあるから」

トモリは何度も頭を下げて、謝った。そして、ボクを手招きした。

「ハルト君、こちらが首長のタガルさんです」

ボクはとりあえず頭を下げた。

「よろしくハルト君、君はサガイなんだよね、楽しみだ」

大きな手が差し出されて、ボクは握手をした。

「こちらが副長のマールさんと同じくソウオウさんです」

紹介されると同時にボクはお辞儀をした。

「よろしくね」

二人とも同時に言った。

「マールさんとソウオウさんは双子なんですよ」

よくよく見てみると瓜二つの顔つきだった。

どうやら新人は役員の人と挨拶をする必要があるようだ。

「それと、もう知ってますよね」

「お、トモリ省く気か？」

からかうようにスウラは笑って言った。

「あ、いえ、違います、違います」

「ボクはスウラね」

「あ、はい」

スウラとは少しだけ話しても大丈夫だと思った。

役員の人たちと挨拶を含めた会話をして、ボクはそのグループからお辞儀をして離れた。

「ハルト君、話題性高いんですよ」

どうも飛び級していることが話題になるようだ。

自分が話題になることは笑われること以外、なかったからなんだからうれしかった。

「あの、ハルト君？」

「あ、ごめん」

考えることが多くて、ぼーっとしていたみたいだ。

トモリが歩き離れていることにさえ気づかなかった。

「じゃあ、ちよつと座りましょうか」

トモリは駅を出てすぐの公園のベンチを指差した。

トモリはいつもボクよりも前を歩く。ボクが遅いつてもあるけど、それにしても早い。

いつもの歩いているスピードが早歩きのスปีドだ。

普通の人と話しながら歩くスปีドよりも遅いボクだと離れて行く一方だ。

今回もボクが遅れていて、トモリがベンチに座ってこっちを見て

笑っていた。

「ハルト君はこつちの世界が不思議ですか？」

「不思議って言うか・・・」

トモリは水筒から紅茶を出して、紙コップに注いだ。

「はい、どうぞ」

コップを手渡すと、トモリはすぐに砂糖とミルクを取り出した。

「いりますか？」

ボクは紅茶を飲んだことがなかった。だから、少し固まってしまった。

「嫌いですか？」

ボクは首を横に振った。

「初めて飲むから」

「あ、そうですか、じゃあ、お砂糖もミルクも全部入れてみた方がいいですよ」

トモリはボクにスティックタイプの砂糖とカップに入ったミルクを渡してくれた。

ボクは渡された砂糖を先に入れて、次にミルクを入れた。

「おいしいですよー」

せかされてボクはカップに口をつけた。

「あ、ほんとだ」

その言葉になのかトモリはふふふと笑った。

「ハルト君、かき混ぜないと」

砂糖と一緒に渡されていたマドラーを使っていなかったから、まだ混ざっていないかった。

ボクはシルバーのマドラーでカップの中をかき混ぜた。

白い渦ができて、全体が俗に言うミルクティー色になった。

「さあ、どうぞ」

すすめられて再度ボクはカップに口をつけた。

さっきよりも甘くて、とてもおいしかった。好きだ。

「どうですか？」

「おいしいよ」

「よかったー」

トモリはニコツと笑って手を胸に当てた。

「もし、嫌いだったらどうしようかと思いました」

紅茶を飲みながら、トモリは一方的だったけどボクにいろいろ話をしてくれた。

話によるとトモリはこっちに来るまでの間。世界中の紅茶を集め、紅茶の農園を外国に持っていらしい。

どおりで素人でもすぐくうまいとわかる紅茶を持っているわけだ。この紅茶はトモリが集めた中でも1、2を争うらしい。

でも、紅茶のおいしさは自分で決めたからハルト君には合わないかもと冗談をつけくわえていた。

「ごめんなさい、話すぎちゃって、それで本題に入りますね」
もう見慣れたプリントがボクに手渡された。

「コピーとりましたから、ハルト君にあげますね」
さっきまで見ていたのとは違い、フタの字は手書きではなく印刷されていた。

「ありがとう」

ボクはそれを後で読むことにしてポケットにたたんでしまった。

「あのさ、それより質問なんだけど」

「はい、わかりました」

そうしてトモリはおもむろにメモを取り出した。

「はい、どうぞ」

「あの、トモリ」

「はい、なんででしょう？」

いつも純粋な顔で聞いてくるから、やっぱり天然なんだろう。

「なんでメモ？」

「それはですねー」

トモリがメモにむかって何かを書き始めた。そして、書き終わったのかそれを見せた。

『わからないことがたくさんあるんです』

なんでこの人は口で言わないんだろっ・・・

「あの、なんで言わないの？」

「いや、なんとなくですよ」

・・・トモリはかなりの天然だ。今はっきりした。

「そうだね、じゃあ質問するね」

「はい、どうぞ」

トモリは片手にペン、片手にメモを持った。

第二章 不思議な駅（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

何話になるかわかりませんが頑張っていきたいです。

感想をいただけたら幸いです。

本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7991c/>

ハルト～願い屋～

2010年10月22日00時55分発行